

信教の自由・政教分離 への多様なアプローチ

問題群の所在照らす論文等32篇を収録

国家と宗教 上下

宗教から見る近現代日本

京都仏教会監修／洗 建・田中 滋編

由」を定めていたことはよく知られている。しかし、この「信教の自由」は国家神道体制確立の障害とはならず、その中でいくつもの宗教弾圧が行なわれた。近代日本の宗教史を顧みる時、あらためて「信教の自由」とは何かが深刻に問われる。本書に収める二十九篇の論文、三篇のインタビューは、個々のテーマは多彩だが、それぞれの角度からこの問題にアプローチするものと見ることができる。

京都仏教会が平成十八

年二月から計十二回開催（理事長）という認識のもとした研究会が本書のべー立ち上げた研究会だ。その成果が二巻の学術論文集としてまとめられたことを深め、宗教法人法改定とには大きな意義があるをはじめ政教分離が問われる状況に積極的に対応してきた京都仏教会が、「信教の自由」とその制度的保障としての「政教分離」が一体何を意味するのか、具体的な現実の場においてそれがどのよ

うな役割を果たすのかについては理解はさまざまに分かれる。洗建、田中滋、島蘭進、末本文美、田中治、桐ヶ谷章、平野武、野田正彰、小原り。本書の構成は次の通り。

◎上巻「国家神道」形成から国家総動員体制へ」Ⅱ総論「法律と宗教」、第一部「国家神道」形成期の葛藤、第二部「国家総動員体制下の宗教」

◎下巻「新憲法体制から新自由主義体制へ」Ⅱ第三部「戦後新憲法と宗教」、第四部「宗教の存在理由への問い―新自由主義経済体制下の『国家と宗教』」、総括「宗教への交錯するまなざし―新自由主義経済体制下の宗教」

定価上・下各三、六七五円、法蔵館（電話〇七五・三四三・五六六）刊。

